陰陽師クラブへようこそ⑤

最後の事件は悪魔のたくらみ!?

卯月みか・作
雨宮もえ・絵

アルファポリスきずな文庫

目次

プロローグ 006

第一章　ドキドキのバレンタイン

一．スイートクッキング 015
二．バレンタインの魔法 030
三．ごめんね 047
四．あやしい気配 054

第二章　不吉の足音

一．不思議な骨董品店 060
二．魔女の助言 069
三．ダブルデート 079
四．命の危険 099

第三章　最後の七不思議

一．本に宿る者 112
二．悪魔との契約 122
三．お別れのあいさつ 132
四．卒業おめでとう！ 145

第四章　つばさ小学校、最後の事件

一．悪魔の召喚 154
二．異世界へ通じる扉 167
三．つばさ小の守り手 176

エピローグ 181

あとがき 188

神宮寺先生

陰陽師クラブの顧問。
保健室の先生。

碧さん

つばさ小を見守る龍。
陰陽師クラブに加入した。

フローラ

ミーナの家の庭に住む、
妖精のお姫様。

悪魔

『天使占い事件』の黒幕。
皇家で使役されている。

空耶

稲荷神社の神様のお使
いの霊狐。

つばさ小の七不思議

トイレの花子さん、絵を描く幽霊、
しゃべる音楽室の肖像画など……

これまでのおはなし

私、花村真結は転校先の私立つばさ小学校で“見えちゃイケナイ”ものが見える仲間の陰陽師クラブに出会ったんだ！
私とミーナの卒業を前に、最後の七不思議「異世界に通じる扉」を調査しようとしたら、神宮寺先生に止められちゃって――？

登場人物

花村真結

1年半前につばさ小に転校してきた小学六年生。幽霊とか妖怪とか、“見えちゃイケナイ”ものが見える!?

真白

真結の相棒の管狐。
小さい頃から一緒!

葛城北斗

陰陽師クラブの部長をつとめる中学一年生。陰陽師の末裔で、真結をクラブに勧誘した。

皇美紅

陰陽師クラブの副部長の中学一年生。北斗のいとこで、陰陽師一族の本家の娘。

西山龍太郎

稲荷神社の跡取りの中学一年生。神様の気配が感じられる覡。

星野ミーナ

占いが得意な小学六年生。イギリス人の魔女の血を引いている。

衣川螢太

憑依体質の中学一年生。
アイドルのような美少年で、女子に人気。

プロローグ

二月に入ったある日、私たち陰陽師クラブのメンバーと、新しく入部した龍の碧さんは、いつものようにつばさ小学校の旧校舎に集まり、最後の七不思議、異世界へ通じる扉について話していた。

「オカルトに興味のある子に聞いてみたら、異世界へ通じる扉は常に移動していて、学内のどこに現れるかわからないっていう噂でした」

私、花村真結がみんなの前で情報収集の結果を話すと、部長の葛城北斗くんが、あごに指を当てて「ふむ」と考えこんだ。

「その話は俺も聞いたことがある」

「扉の中に入ると、どこか知らない場所に迷いこんで、帰ってこられなくなるらしいわ」

副部長の皇美紅さんが、葛城くんに続いて言った。

「帰ってこられなくなるなんて、怖いですう」

私と同じ、つばさ小学校の六年生の星野ミーナが、自分の体を抱いてぶるりと震える。

「もし見つけられたとしても、入らないほうがよさそうだな」

腕を組んでまじめな表情でつぶやいたのは、武士みたいな雰囲気をただよわせた西山龍太郎くんだ。西山くんは、葛城くんと皇さんと同じく、つばさ中学校の一年生だ。

「入ってみないと、どこにつながっているのかわからないじゃん」

同じくつばさ中学一年生の衣川蛍太くんが肩をすくめ、机の上に広げてあったお菓子の中から、きのこの形をしたチョコレートを取り上げて口に入れた。

陰陽師クラブは、葛城くんと皇さんが小学四年生の時に立ち上げたクラブだ。

旧校舎の教室を部室にしていたんだけど、とある事件の後、旧校舎に鍵がかけられるようになり、自由に出入りができなくなってしまった。

上級生のみんなも小学校を卒業してしまい、旧校舎を使いたいなら忍びこむしかないなんて話をしていたこともあったけれど、今は顧問の神宮寺先生が職員室から鍵を借りてきてくれているので、安心してここで活動を続けられている。

『では、ためしに蛍太が入ってみるといいのではないか？』

碧さんがいたずらっぽい口調で衣川くんにすすめると、衣川くんは「うげ」という顔になった。
「俺、異世界で迷子になりたくないよ」
碧さんに向かってくちびるをすぼめてみせる衣川くんを見て、碧さんは『ははは』と笑った。
碧さんの正体はつばさ小を守っている龍なんだ。だけど、私たちの前に現れる時はいつも人間の姿をしている。
「とりあえず、花村君と星野君は、引き続き、つばさ小で情報収集をしてくれたまえ。ただし、扉を見つけても、絶対に入ってはだめだ」
「わかりました」
「はぁい」
私とミーナは葛城くんの言葉にうなずいた。
「私たちも中学校で、過去に扉を見たことのある人がいるか聞いてみるわ」
皇さんはそう言ってこの話題を締めくくり、「さて」と手を打った。
「そろそろ帰りましょうか。暗くなってしまうわ」
皇さんの視線につられて窓を見る。外は夕日の色に染まっていた。

「皇。家まで送ろう」
西山くんが立ちあがって皇さんを誘う。
皇さんは、ほんのりと頬を染めて「ええ」とうなずいた。
二人は去年の夏から付き合っている。最近、ますます仲良くなってきたみたい。
「ミーナちゃんは俺が送るね」
衣川くんがミーナに声をかけると、ミーナは「ありがとう」と微笑んだ。
なんだかこの二人も、最近いい感じなんだよね……
「葛城はもちろん真結ちゃんを送るよな」
葛城くんのほうを向いて、衣川くんがにやりと笑う。
葛城くんは髪のはねた頭をかき、そっけない様子で横を向いた。
「……もちろん」
そのまま、小さな声で答える。
照れくさそうな葛城くんを見て、私も気恥ずかしくなる。
実は、私と葛城くんも付き合っている。陰陽師クラブのメンバーも、なんなら私の両親や葛城くんの家族も公認の仲だ。

「じゃあ、みんなで途中まで行きましょう」
皇さんがリュックを手に取り、みんなをうながす。
『校門まで見送ろう』
碧さんが青い着物の裾を揺らして立ちあがった。
私たちは碧さんと連れだって、旧校舎を出た。

旧校舎の鍵を神宮寺先生に返すため、私たちはいったん保健室へ立ち寄った。
「神宮寺先生、失礼します」
皇さんが声をかけ、戸を開ける。
デスクに向かい、何か書き物をしていた神宮寺先生が振り返った。
「やあ、みんな。遅くまでがんばっていたんだね」
神宮寺先生は、私たちのそばに碧さんがいることに気付き、軽く会釈をした。
龍の碧さんの姿は普通の人には見えない。だけど、神宮寺先生は私たちと同じで、妖怪や霊といった怪奇現象を見る力を持っている。
碧さんのことも知っていて、二人は顔なじみなんだ。

「碧さんがついてくださっているから安心してはいるけれど、今度からはもう少し早く切り上げなさい。暗くなると帰り道が危ないからね」
まじめな顔で注意をした神宮寺先生に、私たちは素直に謝った。
「はい、すみません。今度から気を付けます」
先生の言う通り、遅くなりすぎるのはよくない。
「承知した。部長として、俺も軽率だった。今度からはそうしよう」
葛城くんが代表して神宮寺先生に約束すると、神宮寺先生は表情をやわらげた。
「今はどんな怪奇現象を追っているんだい？　熱心だね」
興味を引かれたようにたずねた神宮寺先生に、私とミーナが交互に説明をする。
「つばさ小学校の七不思議のうち、六つまではわかっているので、まだ見かけたことのない最後の不思議について調べています」
「あたしたちが卒業するまでに、七つ目の不思議を見つけたいねって話しているんですう」
「七つ目っていうのは、この学校のどこかに現れる、異世界へ通じる扉のことなんです。それを解明してから小学校を卒業したいなって思って――」
「それはさがさないほうがいい」

私が最後まで言い終わるよりも早く、神宮寺先生が私の言葉にかぶせるようにして、きっぱりとした声音で止めた。
私たちは「えっ」と目を丸くし、固まってしまった。
だって、いつも優しい先生が、とても厳しい顔をしているから……
驚いている私たちに気付いたのか、神宮寺先生はすぐに穏やかな表情に戻った。
「とにかく、七つ目の七不思議はさがしてはダメだよ。本当に異世界へ迷いこんでしまったら大変だからね」
特に部長の葛城くんの顔を見て、言い聞かせるように、神宮寺先生が念を押す。
顧問の先生の注意を聞いて、葛城くんは素直

に「わかった」と答えた。
「気を付けよう」
私たちは「さようなら」と口々に神宮寺先生にあいさつをすると保健室を出た。
昇降口に向かって廊下を歩きながら、皇さんが不思議そうに葛城くんに話しかけた。
「神宮寺先生、何か様子がおかしかったわね」
「そうだな」
葛城くんが腕を組んで考えこんだ。
「俺たちに、異世界へ通じる扉を見つけてほしくないみたいだったよな」
衣川くんが首をかしげると、ミーナも頬に指を当て、同じように首を傾けた。
「あたしたちの誰かが、迷いこんじゃったら大変だからかなあ？」
神宮寺先生はきっと、私たちのことを心配してくれているんだろう。
おしゃべりをしながら、七不思議の一つ、大人になった姿が見える鏡の前を通りかかると、六人の大人の姿が映った。
ふわふわとした明るい髪の、西洋のお人形みたいな女の人はミーナ。
長い黒髪がすてきな、きりっとしたきれいな女の人は皇さん。

さわやかな顔立ちで、筋肉質な男の人は西山くん。
芸能人みたいに華やかで甘い顔立ちの男の人は衣川くん。
髪はぼさぼさだけど、賢そうな目元をした男の人は葛城くん。
そして、葛城くんの横には、ぱっちりとした目の女の人が並んでいる。二十歳になった私の姿だ。
この姿になっても、私たちは一緒にいられるのかな。
ずっと陰陽師クラブの仲間として、活動していけたらいいなぁ……
『真結、どうしたんだい？』
先頭を歩く碧さんが振り向き、立ち止まっていた私を呼んだ。
「なんでもないです」
私は顔を正面に戻すと、先に行っていたみんなに、小走りで追いついた。

第一章　ドキドキのバレンタイン

一．スイートクッキング

教室で帰り支度をしていた私に、ミーナが近付いてきた。
「真結ちゃん、今日は、うちにくるよね？」
「もちろん！　この間から、ずっと楽しみにしてたんだよ！」
私はミーナに笑顔を向けた。
「あたしも、真結ちゃんと美紅ちゃんとお菓子を作るのを、とっても楽しみにしてたんだあ」
ミーナもにこっと笑う。
この間の部活の時、私とミーナと皇さんは、男子に気付かれないようにこっそりと、ミーナの家でチョコレートのお菓子を作る約束をしていた。
なんでかっていうと、バレンタインデーがあるから！

お父さんや、友だちや、知り合いの男の人にも渡そうと思っているけれど（碧さんとかね）、私が一番渡したいのは、やっぱり葛城くんだ。

皇さんはきっと西山くんだろう。

ミーナは何も言っていなかったけど、衣川くんに特別なのをあげるのかな？

連れだって校門を出た私とミーナは、学校近くの橋のたもとで、中学校帰りの皇さんと合流した。

「皇さん、西山くんにバレなかったですか？」

二人はよく一緒に下校している。皇さんがどうやって西山くんをごまかしてきたのか気になって聞いてみたら、皇さんはいたずらっぽい目をして教えてくれた。

「用事があるから今日は一人で帰るわねって言って、急いで教室を出てきたの。二人と約束してお菓子を作る予定だってことは、気付かれていないと思うわ」

「よかったです。やっぱり内緒で作って、当日びっくりさせるほうが楽しいですもんね」

私の言葉に、ミーナも「うんうん」とうなずいている。

「それじゃあ、途中でスーパーに寄って材料を買ってから、あたしの家に行きましょう～」

「楽しみだわ」

「そうですね！」

私たちは今日作る予定のお菓子についておしゃべりしながら、スーパーを目指した。

スーパーでチョコレートや卵や薄力粉など、お菓子作りの材料を買いこむと、私たちはハーブティーのカフェをやっているミーナの家に向かった。

ミーナが住んでいる家の玄関は、お店の奥にある。

カフェの店内にはお客さんがいたので、邪魔にならないようにそうっと通り抜けようとしたら、キッチンにいたミーナのおばあちゃんがこちらを向いた。

「あら、みんな。いらっしゃい」

ミーナのおばあちゃんはメアリーさんっていう、イギリスの人だ。

イギリスに留学していたミーナのおじいちゃんと知り合って、結婚の約束をかわし、日本に来たんだって。

こちらに住んで長いから、とっても日本語がうまい。

そして、ハーブや魔術に詳しい魔女なんだ。

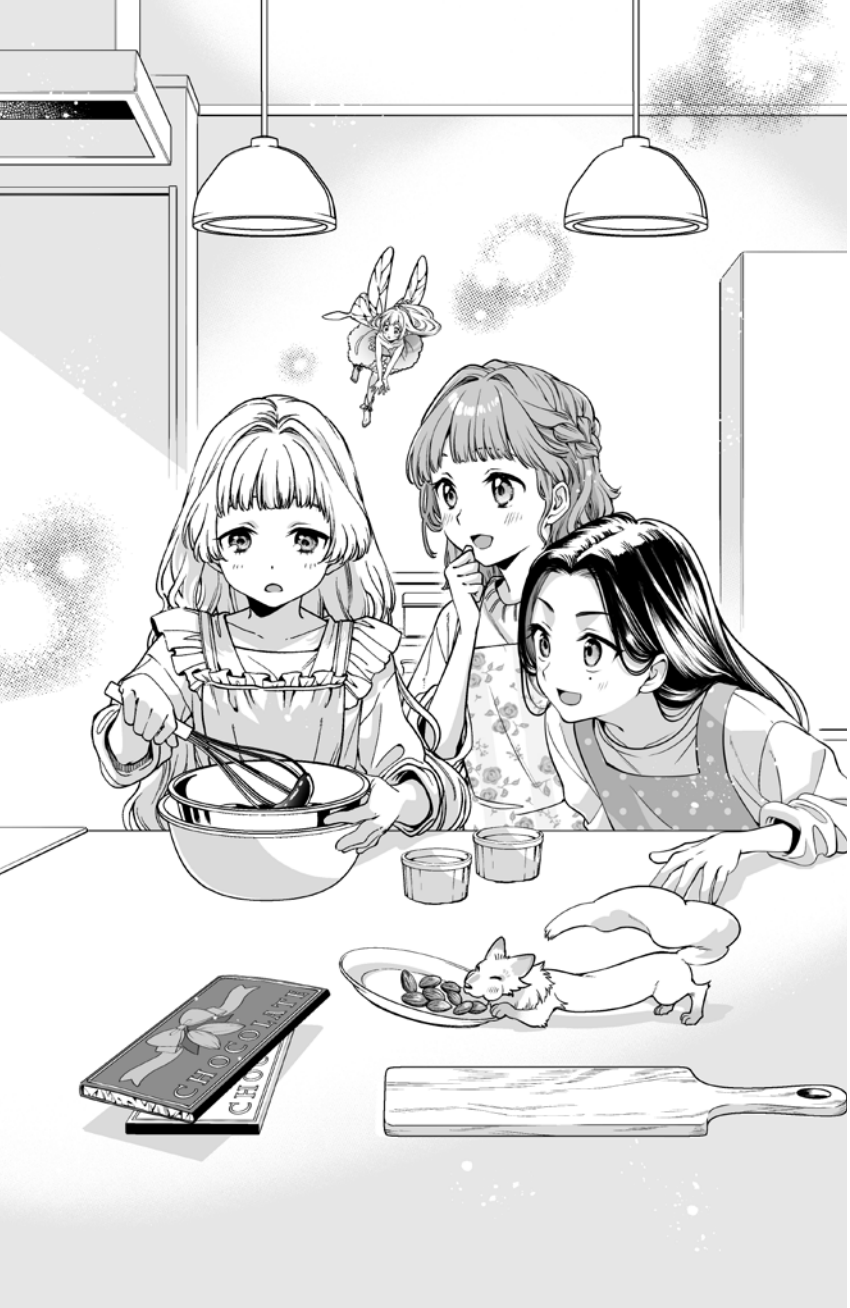
そんなおばあちゃんの孫であるミーナは、魔女の卵として、いろんなことを教わっている。

カウンターの椅子で眠っていた黒猫が私たちに気付き、顔を上げた。
つやつやな毛並みのこの子はノワールという名前で、ミーナのおばあちゃんが飼っている魔女のお使い猫だ。
「今日はみんなでお菓子を作るんだあ。おいしくできたら、おばあちゃんにもあげるね」
「ふふ。楽しみにしているわね」
楽しそうな孫娘を見たメアリーさんが、優しい瞳で微笑んだ。
ミーナの家に入り、私たちはキッチンに向かった。
「真結ちゃん、美紅ちゃん、いらっしゃい。道具は出しておいたわよ」
キッチンにいたミーナのお母さんが振り向き、私たちに笑いかけた。
調理台の上にはボウルやミキサー、ケーキ型など、お菓子作りの道具が並べられている。
ミーナがあらかじめ、私たちとお菓子作りをするのだと話しておいてくれたんだろう。
「すみません、今日はおじゃまします」
「こんにちは」
丁寧にあいさつをした皇さんの後ろで、私もおじぎをする。
「みんなが作ったチョコレートのお菓子、男の子たちはきっと喜んでくれると思うわ。がんばってね。何か困ったことがあったら呼んでちょうだい」
ミーナのお母さんは「うふふ」と楽しそうに笑うと、キッチンを出ていった。
私たちは照れくさい気持ちで顔を見合わせた。葛城くんも西山くんも衣川くんも喜んでくれたらいいな。
「まずは材料を量りましょう〜」
ミーナがはかりを引き寄せ、私と皇さんはスーパーの袋から材料を取りだして調理台の上に並べる。
今日作る予定のお菓子はチョコレートケーキ。
お菓子作りが得意なミーナはレシピを覚えているのか、手際よくボウルに材料を入れて量っていく。
私が卵を割って混ぜている間、皇さんは電子レンジでチョコレートとバターを溶かした。
溶けたチョコレートとバターに砂糖を入れてぐるぐる混ぜてなじませたら、といた卵を流し入れる。
「真結ちゃん、次は粉を入れるね」
「わかった」

ミーナが横からボウルに薄力粉とベーキングパウダーを加える。
「チョコレートをきざんでおいたの。これも入れてみてはどうかしら」
皇さんの提案に私とミーナは、「いいと思う！」と賛成した。
しだいに粉っぽさがなくなって、生地がまとまってきた。
「もういいと思うよお。ありがとう、真結ちゃん」
ミーナがボウルを受け取り、クッキングシートをしいたケーキ型に生地を流し入れた。
皇さんが手伝い、ゴムべらでボウルに残った生地をきれいに取って、それも型に入れる。
予熱しておいたオーブンにケーキ型をのせた天パンを入れると、私たちは「ふう〜」と息を吐いた。
「ミーナ、何分ぐらい焼くの？」
私の質問に、ミーナがタイマーをセットしながら答える。
「五十分ぐらいかなあ？」
「じょうずに焼けるといいわね」
皇さんが期待のこもった瞳で微笑んだ。
ダイニングテーブルに座ってミーナがいれてくれたハーブティーを飲み、おしゃべりしながら、チョコレートケーキが焼けるのを待っていると、キッチンに小さな羽音が聞こえてきた。
虫でも入ってきたのかな？　だったら追い出さなきゃ。
きょろきょろと姿をさがすと、それは虫ではなくて、花びらのようなドレスを着た身長が十五センチぐらいの女の子だった。
女の子は、虹色に光る羽を揺らして飛んできて、ミーナの肩にちょこんと腰を下ろした。
お人形のように小さなこの子は、ミーナの家の庭に住み着いている妖精の一人で、フローラちゃんっていうお姫様だ。
『何かいい匂いがするから来てみたのだけど、もしかして、あなたたち、お菓子を焼いていたの？』
フローラちゃんがキッチンにただよう甘い香りをかぐように、鼻をすんすんと鳴らした。
「そうだよお。みんなでチョコレートのお菓子を作っていたの」
『あら、いいわね。わたくしも食べたいわ』
「じゃあ、焼けるまでここで待ってる？」
『待つわ』
フローラちゃんはミーナの肩から飛び立つと、ダイニングテーブルの上に座った。

ドレスの裾が広がって、本当にお花みたい。
ミーナが戸棚からミニチュアのティーカップを出してきて、フローラちゃんにもハーブティーをいれてあげると、フローラちゃんはソーサーを左手に、カップを右手に持って、上品に口を付けた。
女子四人になり、再びおしゃべりに花が咲く。
もうすぐ小学校を卒業する私とミーナは、皇さんからつばさ中学校がどんなところなのか、いろいろと教えてもらった。
「そういえば、生徒会の江藤会長と九条副会長が、付き合い始めたらしいわ」
皇さんの情報に私はびっくりした。
江藤光麒くんと九条茉莉花さんは、つばさ中の三年生だ。九条副会長のことを、私はマリカさんって呼んでる。二人とは前に小・中学校合同の林間学校で一緒の班になったことがあるんだ。
女の子に甘く接する江藤生徒会長と厳しいマリカさんが付き合うなんて驚いたけど、意外とお似合いの二人かも。
江藤会長とマリカさんのことを考えていると、皇さんがふと思いついたというように私にたずねた。
「花村さんは、北斗とよくデートをしているの？」
直球の質問に、思わずハーブティーにむせる。
「ごほっ、ごほっ……」
「だ、大丈夫!?　花村さん！」
ハンカチを差し出してくれた皇さんに、私は「大丈夫です」と言って、自分のハンカチを取りだし、口元をふいた。
「よくってほどではないですよ……」
頬をほてらせながら答えると、皇さんは意外そうな顔をした。
「そうなの？　とても仲がいいから、学校が休みの日は、あちこち出かけているのかと思っていたわ」
「えっと……クリスマスには、お買い物デートに行きましたよ……」
照れくさくて小声で答えた私に、皇さんが、うらやましそうに言う。
「お買い物デート、いいわね！」
「そういう皇さんは、西山くんとどこかに出かけないんですか？」

今度は私が質問すると、皇さんは頬を赤くしてはにかんだ。
「スポーツ観戦とか、バッティングセンターとかなら、よく行くわ」
わあ！　デートの行き先が、体育会系の西山くんっぽい！
「体を動かすことも楽しいのだけど、私もたまにはお買い物デートをしてみたい」
両手を組んで夢見るような顔をしている皇さんが、恋する女の子って感じがして、とってもかわいい。
「今度、西山くんを誘ってみたらどうですか？」
「西山くん、お買い物に興味があるかしら？」
「必要なものがあるから、買いに行くのを付き合ってほしいって頼んでみるのはどうでしょう？」
「それ、さりげない感じがしていいわね」
私と皇さんが、西山くんをお買い物デートに誘うにはどうしたらいいかという話をしていると、ミーナがぽつりと「いいなぁ」とつぶやいた。
「ミーナ？」
さみしそうな声だったので、気になって彼女を見ると、ミーナはうつむきがちに何かを考えている様子だった。
私は思い切って、前から気になっていたことを、ミーナにたずねた。
「ねえ、ミーナ。もしかしてミーナは衣川くんが好きなの？」
ずばり聞くと、ミーナは一瞬驚いた顔をした後、恥ずかしそうにうつむいた。
「……うん、好き」
体の前で指をもじもじとからめながら、ミーナが告白する。
やっぱり、ミーナは衣川くんのことが好きだったんだ。
皇さんも感じ取っていたのか、納得したような顔をしている。
「星野さんは前に、私に、西山くんに告白しないのかって聞いてくれたわよね？　好き同士なら問題ない、気持ちを伝えたら、西山くんはきっと喜んでくれるって。星野さんは衣川くんに告白しないの？」
優しい声でたずねた皇さんを見上げ、ミーナは悲しそうに首を横に振った。
「告白する勇気、ないの。あたし、四年生の時に、好きな男の子がいたんだけど、その子がかげで『星野さんは何もないところを見てひとりごとを言っていたり、不思議ちゃんって感じで考えていることが読めないから苦手』って言っているのを聞いちゃったんだあ。それから、男



の子を好きになっても、どうせあたしのことなんて好きにならないんだろうなぁって考えるようになっちゃったの」

好きだった男の子に悪口を言われているのを耳にしたミーナは、きっとすごく傷ついたにちがいない。

泣き出しそうな顔をしているミーナを見て、私の胸がぎゅっと痛くなる。

「衣川くんは大丈夫だよ！」

私はミーナの手を取ると、勇気づけるようにぎった。

「見える仲間だもん。ミーナのことを、何を考えているのかわからないなんて言わないよ」

力強く言うと、皇さんもうなずいた。

「衣川くんは、そんな風にかげでこそこそ言うような人じゃないわ」

「真結ちゃん……美紅ちゃん……」

ミーナの瞳がうるむ。

「ありがとう。そう言ってくれて、すごく嬉しい」

ミーナが泣き笑いを浮かべた時、オーブンがチンと鳴った。

「ケーキが焼き上がったみたいね」

皇さんがオーブンに目を向ける。
「うまく焼き上がってるといいね」
私がミーナを振り向くと、ミーナは涙をぬぐって分厚いミトンを手に取った。
オーブンの蓋を開けると、ふわりと甘い香りが広がった。
ミトンをはめたミーナが注意深く天パンを取り出し、調理台の上に置く。
チョコレートケーキはきれいに焼き上がっているように見える。
「これって成功だよね？」
ミーナにたずねると、ミーナはそっとケーキに竹串を刺し、焼き加減を確認してから「成功だよお」と微笑んだ。
「とってもおいしそう」
「味見しようよ」
待ちきれない私を、ミーナが止める。
「粗熱を取ったほうがいいよお。冷めるまで、もう少し待とう」
「じゃあ、その間にラッピングの準備をしておきましょう。私、色々持ってきたのよ。好きなのを選んでちょうだい」

皇さんがカバンの中から、かわいいイラストがプリントされた袋や箱や、リボンを取り出した。
「すごい！　準備がいいですね」
「このピンクの箱、かわいいねえ。あたし、これにしたいなあ」
「花柄が、星野さんに似合ってると思うわ。こっちのリボンを付けると、もっとかわいくなりそう」
皇さんがミーナにレースのリボンを手渡す。
私たちが楽しくラッピングを選んでいると、フローラちゃんも近寄ってきて、リボンをつまんだ。
小さなフローラちゃんがリボンを持つと、まるでお姫様が身にまとうショールみたいに見える。
『これでお菓子を包むの？』
興味津々のフローラちゃんに、ミーナが「そうだよお」と答える。
「蛍太くん、喜んでくれるといいな……」
花柄の箱を手に、ほんのりと頬を染めているミーナの顔を、フローラちゃんがじっと見上げている。

『ミーナは蛍太が好きなのね……。でも気持ちを伝えられない。それなら、わたくしが協力してあげないと……』

フローラちゃんが、何やらぶつぶつ言っているような気がしたけれど、声が小さくてよく聞こえない。

フローラちゃんを気にしていたら、皇さんに「花村さん」と呼びかけられた。

「花村さんには、こっちのストライプの箱が似合いそうな気がするの。それとも、北斗の好きな色にする？」

葛城くんって何色が好きなんだろう？

それが気になって、私の意識はすぐに、フローラちゃんからラッピングへと移ってしまった。

二．バレンタインの魔法

ミーナと皇さんと三人でチョコレートケーキを作った翌日、私はミーナと一緒に学校前の河川敷に向かった。

あらかじめ、葛城くんに「渡したいものがあるから、放課後、衣川くんも誘って河川敷に来てほしい」ってメッセージを入れてある。

「本当に、私と一緒でよかったの？」

校門を出ると、私は隣を歩くミーナにたずねた。

「あたし一人よりも、真結ちゃんが一緒にいてくれたほうが自然だから」

ミーナは私の問いかけに、にこっと笑って答えた。

ミーナの肩の上には、今日はフローラちゃんが座っている。

今朝、フローラちゃんは、学校について行きたいって駄々をこねたらしい。

ミーナが「妖精さんは学校に行かなくていいんだよお」って言っても、フローラちゃんがどうしても行くと言ってきかなかったから、一緒に登校したんだって。

なんでいきなりフローラちゃんが学校に行きたいなんて言い出したのかはわからない。でも、フローラちゃんの姿は、力のある私たちにしか見えないから、彼女が今日一日ミーナの机の端に腰かけて一緒に授業を聞いていても、クラスメイトの誰も気付かなかった。

私の首には、襟巻きのように真白がしっぽを巻き付けている。

真白は私が飼っている管狐っていう妖怪なんだ。

真白はフローラちゃんと遊びたいみたいで、さっきからずっと彼女を気にしている。
私は、いつも通りのふわふわとした微笑みをたたえているミーナの横顔を見つめた。
衣川くんに気持ちを伝えるチャンスなのに、二人きりじゃなくてよかったのかなぁ……？
悪口を言った男子のことが心の傷になって、勇気が出ないのかな……
そう考えて、私は気が付いた。
昔、ミーナが好きだったという男子は、ミーナが何を考えているのかわからないっていうようなことを言ったみたいだけど、それはきっとちがうんだ。
ミーナは、いつも笑っている。だから、本当の気持ちが見えにくい。
だけどそれって、自分の機嫌で周囲の空気を悪くしないようにっていう、気づかいなんじゃないかな。
見える子であるミーナは、今までいっぱい傷ついてきた。
だから、まわりの人たちのよくない感情に敏感なんだ。
ミーナは何を考えているのかわからないんじゃない。人よりもたくさん考えて、行動しているんだ。
「ん？　どうかした？　真結ちゃん」

私の視線に気が付いたミーナが、こちらを向いた。
「ミーナ、いつもありがとう」
あらためてお礼を言うと、ミーナはきょとんとした。
「あたし、何かいいことをしたかなあ？」
「ふふ。ミーナはいつもいいことをしてるよ！」
私はミーナの手を取ると、ぎゅっとにぎった。
ミーナと手をつないで、河川敷へ続く階段を下りる。
河川敷のベンチには、もう葛城くんと衣川くんが来ていて、私たちを見つけると、手を振った。
私たちは急いで二人にかけ寄り、「こんにちは！」とあいさつをした。
「やあ、花村君。星野君。おや？　今日は真白君とフローラ君もいるのだね」
「ミーナちゃん、真結ちゃん、学校おつかれさま～。それとフローラちゃん、久しぶりだね」
フローラちゃんは以前、葛城くんにひとめぼれして、猛烈にアタックしたことがある。
想いが叶わないとわかって、衣川くんに取り憑いた事件もあったけれど、ミーナに止められて深く反省したみたい。今日はおとなしく、二人に向かって『ごきげんよう』とあいさつを

した。
「急に俺たちを呼び出して、どうしたの？　西山は呼ばなくてよかったの？　あいつ、美紅ちゃんと一緒に帰っていったけど」
「もしや、異世界へ通じる扉について、何か情報を得たのかね？」
気になる様子の二人に、私たちは首を横に振った。
「ちがうんです。えっと……今日は、二月十四日ですよね」
「そうだが……」
私が日付けを言うと、葛城くんが「あ」とつぶやいた。すぐにピンと来たみたいだ。
「これをどうぞ！　昨日、ミーナと皇さんと一緒に作ったんです」
手に持っていた紙袋を葛城くんに渡す。葛城くんは紙袋と私の顔を交互に見て、にこりと笑った。
「今日はバレンタインだったな。贈り物をありがとう」
立ち上がって、私から紙袋を受け取る。私は照れくさい気持ちで微笑み返した。
「わ〜、葛城だけいいなあ」
うらやましそうな顔をした衣川くんに、ミーナがもじもじしながら紙袋を差し出す。

「蛍太くんにはあたしから……」
「ミーナちゃんがくれるの？　まじで嬉しい」
ミーナから紙袋を渡されて、衣川くんが嬉しそうな顔をする。
恥じらうミーナの頬が、ほんのり赤くなっている。
「手作りとはすごいな」
感心している葛城くんの横で、衣川くんがさっそく紙袋から箱を取りだし、リボンをほどいた。蓋を開けて「おお〜」と歓声を上げる。
「めちゃくちゃおいしそう！」
昨日作ったチョコレートケーキは私たちも味見をしてみたけれど、「お店で売ってるものかな？」ってぐらいおいしかった。
こんなにじょうずに作れたのは、お菓子作りが得意なミーナのおかげだ。
「食べていい？」
ミーナが「いいよ」と言うよりも早く、衣川くんはケーキを口に入れた。
「チョコレートが濃厚でおいしい！　ケーキ屋さんのお菓子みたいだよ。これを作ったなんて、二人ともすごすぎ！」

衣川くんの絶賛の言葉に、「気に入ってもらえてよかった！」と、私とミーナは顔を見合わせて笑った。
「本当においしい。食べる手が止まらない……」
「衣川。せっかく星野君がくれたものだ。そんなに急いで食べると、もったいなくはないかね？」
「そんなことを言ったって、やめられないんだよ」
衣川くんは葛城くんが止めても耳を貸さず、何かに取り憑かれたようにケーキを食べ続けている。
その目が、しだいにトロンとしてきた。
——何か変だ。
私だけでなく、葛城くんも衣川くんの異変に気付いたのか、警戒の表情を浮かべた。
あっという間に全部食べ終えた衣川くんは、勢いよくベンチから立ちあがった。衣川くんの膝から、空になった箱が地面に落ちる。
衣川くんの食べっぷりに驚いていたミーナの手をにぎると、衣川くんは彼女にぐいっと顔を近づけた。

「ミーナちゃん、おいしいお菓子をありがとう。こんなにすてきなプレゼントをもらえるなんて、俺、幸せだ。だから、俺からの愛をミーナちゃんに返すよ」
「？？？」
衣川くんの態度が急に変わって、ミーナが戸惑っている。
衣川くんの顔がミーナに近付いていく。
わわっ！　このままだと、キスしちゃう！
ミーナは衣川くんの様子にびっくりしたのか、思い切りつきとばした。
衣川くんが尻もちをつき、「いたた……」とうめく。
「衣川、どうしたのかね？　いくら星野君からお菓子をもらって嬉しかったとはいえ、そのよ

うにせまるのは紳士的ではない」
葛城くんが冷静に注意をしたけれど、衣川くんはすぐさま立ち上がり、再びミーナの手を取ろうとした。
「この熱い想いを隠しておけない！」
「け、蛍太くん……」
衣川くんの告白に喜ぶどころか、ミーナは怖がっている。
私はあわててミーナと衣川くんの間に割りこんだ。
「衣川くん、やめて！」
衣川くん、どうしちゃったんだろう。こんなことをする人じゃないのに。
その場の全員が戸惑っていると、フローラちゃんがミーナの肩の上から飛びたって、内緒話をするように耳元に唇を近づけた。
『蛍太と両想いになれたわよ、ミーナ。よかったわね！』
フローラちゃんの言葉で、ミーナは何かを察したのか、顔色が変わった。
「フローラちゃん、もしかして、蛍太くんに魔法を使ったの……？」
えっ？　魔法？

ミーナはフローラちゃんに非難するような口調で言った。
「ほれ魔法を使ったでしょ!?」
『昨日、ミーナが包んでいたお菓子に、このお菓子を食べた人がミーナを好きになる魔法をかけたの。わたくしの魔法は強力だから、効果抜群でしたわ！』
いいことをしたとばかりにフローラちゃんは胸を張っているけれど、ミーナは唇をかんで震えている。
『これで、蛍太の心はミーナがひとりじめできるわ』
「……フローラちゃん……」
はしゃいでいるフローラちゃんを、ミーナがいつもの彼女らしからぬ低い声で呼んだ。
キッと顔を上げると、ミーナはフローラちゃんをにらみつけた。
「あたし、魔法で好きになってもらっても、全然嬉しくない！」
泣きそうな顔で叫ぶ。
その迫力に、私も葛城くんも息をのんだ。
怒られたフローラちゃんはおろおろしている。
『えっ、でも、ミーナは蛍太が好きなんでしょ？』

「好きだけど……心を操るなんていけないことだよ！　そんなことをするフローラちゃんなんてきらいっ！」
ミーナはフローラちゃんに厳しい言葉を投げつけると、私たちに背中を向けた。そのまま河川敷を走り去っていく。
衣川くんが「ミーナちゃぁん〜！」と名前を呼んで追いかけようとしたけれど、葛城くんがすぐさまその体を取り押さえた。
「衣川、落ち着け。正気に返りたまえ」
『ミーナ……』
羽ばたいていたフローラちゃんは肩を落とし、飛ぶ気力もなくなったみたいに地面にぺちゃんと座りこんだ。
『ミーナが初めてわたくしを怒った……わたくし、いけないことをしてしまったの……？』
ミーナとフローラちゃんは、今までとても仲良しだった。きっと、けんかなんてしたことなかったんだ。
ミーナの心を傷つけてしまったと、しおれるフローラちゃんの前に、私はしゃがみこんだ。
「フローラちゃん、ミーナに謝ろう？」

『きっとミーナにきらわれてしまいましたわ……』
フローラちゃんの瞳がうるむ。
そのまま、はらはらと涙をこぼすフローラちゃんの小さな頭を、私は人さし指でそっとなでた。
「大丈夫。ちゃんと謝れば、ミーナは許してくれるよ」
『そうかしら……。ミーナに絶交されたらどうしよう……。わたくし、ミーナが大好きですの……だから、ミーナの願いを叶えてあげたかったの……』
手の甲で自分の目をこすりながら泣いているフローラちゃんは、まるで今にも消えてしまいそうに、か弱く見えた。
「まずは衣川くんの魔法をといてあげて。このままだと、衣川くんもかわいそうだから」
私が頼むと、フローラちゃんはこくんとうなずいた。
飛ぶ元気がなさそうだったので、フローラちゃんの体をすくうようにして手のひらにのせ、私は、葛城くんにはがい締めにされながらも暴れている衣川くんの前に立った。
フローラちゃんが私の手の上に立ち、衣川くんに向けて両手をかかげる。
目を閉じ、真剣な表情で、何語かわからない歌を歌った。

『シルフの王女の名において、魅了の力を無に帰す！』
最後にそう唱えると、フローラちゃんは片手を振った。
フローラちゃんの指先から光の粒が飛び、それが衣川くんの目に入ると、衣川くんは我に返ったのか、ぱちぱちとまばたきをした。
「あれ？　俺……」
「衣川、正気に戻ったか」
衣川くんをつかまえていた葛城くんが、安心したように手を離す。
「よかった！」
ほっとしたら、肩の力が抜けちゃった。
衣川くんの視線が、私の手の上にいるフローラちゃんに向いた。衣川くんのまなざしにたじろぎ、フローラちゃんはばつの悪い表情でうつむいた。
「君が俺に何かしたんだね」
『ごめんなさい、ごめんなさい……』
フローラちゃんが泣きながら何度も頭を下げる。
衣川くんは怒った顔をして、謝るフローラちゃんを見ていたけれど、しばらくして小さなた

め息をついた。
「俺のことはもういいよ。それよりも、ミーナちゃんに謝って」
きっぱりとした口調で言われて、フローラちゃんがびくりと肩をふるわせる。
「友だちなんだろ？　悪いことをしたと思うなら、謝るべきだ」
衣川くんにさとされて、フローラちゃんが覚悟を決めたように両手をにぎった。
『……ええ、謝るわ。だってわたくし、ミーナのことが好きだから、このままなんていやですもの……』
フローラちゃんが約束すると、衣川くんの表情がようやくやわらいだ。頭の上で両手を組み、「あーあ」と声を出す。
「俺、フローラちゃんにひどい目にあわされてばかりだ」
以前、フローラちゃんに取り憑かれた時のことを思い出しているんだろう。
『ごめんなさい……』
しゅんとするフローラちゃんに、衣川くんは仕方ないという苦笑いを浮かべる。
「妖精はいたずら好きな生き物だもんな」
そう言った後、衣川くんは私と葛城くんに向き直った。

「止めてくれてありがとう。二人とも。俺もミーナちゃんのところに行ってくる」
「そうしたまえ。早いほうがいい」
「葛城、サンキュー！　真結ちゃんも、またね」
衣川くんは手を振ると、河川敷をかけていった。
ミーナに謝りに向かった衣川くんの背中を心配な気持ちで見送っている私の肩を、葛城くんが優しく叩いた。
「安心したまえ。衣川と星野君なら大丈夫だ」
力強くそう言われて、不安な気持ちがほぐれる。
「そうですね」
うなずくと、葛城くんは、あらたまった口調で「それで」と続けた。
「俺も花村君の作ったお菓子を食べていいだろうか？」
照れくさそうに聞かれて、ドキッとする。
目の前で食べてもらうのは、正直ちょっと恥ずかしかったけれど、私は「いいですよ」と答えた。
葛城くんがベンチに座り直したので、私も隣に腰かける。

紙袋から丁寧に箱を取り出すと、葛城くんは壊れ物を扱うように、そうっとリボンをほどいた。蓋を開けて、嬉しそうに目を細める。
葛城くんの一つ一つの動作や表情から、私のプレゼントを大切に想ってくれている気持ちが伝わってきて、胸の中があたたかくなる。
チョコレートケーキを見つめてなかなか手に取らない葛城くんに、私は「もしや」と考え、声をかけた。
「私のものには、ほれ魔法はかかっていないと思いますよ」
「そうだよね？」と言うようにフローラちゃんを振り向くと、真白になぐさめられていたフローラちゃんが、
『ええ。真結のものにはかけていませんわ』
と答えた。
「ああ、いや、そういう心配をしていたわけではないよ」
葛城くんが慌てた様子で片手を横に振る。
「花村くんの手作りだと思うと嬉しくて……早く食べたい気持ちと、取っておきたい気持ちがせめぎ合っていたんだ」

幸せそうな表情に、私の胸がキュンとする。
「では、いただきます」
葛城くんは心を決めたようにケーキをつまんだ。
私は葛城くんの顔をじっと見つめた。
ぱくんと口に入れて、葛城くんの顔がほころぶ。
「おいしい。すごく」
「よかった！」
自信はあったけど、そう言ってもらえると本当に嬉しくて、私は満面の笑みを浮かべた。
チョコレートケーキをかじる葛城くんをじいっと見ていたら、葛城くんが照れたように口元を押さえた。
「そんなに見られていると落ち着かない」
「おいしそうに食べてくれるのが嬉しいんです」
葛城くんは私の耳元に唇を近づけると、「大好きだ」とささやいた。
心臓がドキンと鳴る。
葛城くんはすぐに離れてしまったけれど、すっかり熱くなってしまった私の頬は、なかなか冷めてくれなかった。

三．ごめんね

フローラちゃん、ひどい！
家に帰ったあたしは、自分の部屋にかけこむなり、ベッドに突っ伏した。
前は何も気にせず義理チョコを渡せたのに、蛍太くんのことが好きって気付いてから初めてのバレンタインにチョコを渡すのは緊張して、真結ちゃんについてきてもらった。
勇気を出して渡せたのに、フローラちゃんがお菓子にほれ魔法をかけていたなんて……
魔法にかかった蛍太くんに告白されても、ちっとも嬉しくないよ……
だって、それって本当の気持ちじゃないもの。
悲しくって泣いていると、扉の外からママの声が聞こえてきた。
「ミーナ、お友だちが来ているわよ」
誰？　真結ちゃんかな？　心配して家まで来てくれたのかも……

相手が真結ちゃんでも、会う元気が出ない。
小さな頃から、人には見えないものが見えていたあたしのことを、友だちは気味悪がった。
「あたしのお家のお庭には妖精さんが住んでいるんだよ」って話しても誰も信じてくれなかったし、「夢見がちな変わった子」って言われて、距離を置かれてしまった。
だから、あたしは笑うようになった。笑っていたら、周りの人に少しは安心してもらえるかなって思って。
そうしたらそのうちそれがクセになって、笑っていないと、自分が不安になるようになっちゃった。
でもね、今は笑えない。
「ミーナ、もしかして体調がよくないの？　お友だちには帰ってもらう？」
ママの心配そうな声を聞いて、私は気持ちを切り替えた。
「大丈夫。今、行くね」
せっかく来てくれた真結ちゃんに悪いもの。あたしは大丈夫だよって言わないと。
ママが「お店で待っていてもらっているわよ」と言ったので、あたしはカフェに向かった。
家とカフェをつなぐ扉を開けてお店に入ると、そこで待っていたのは真結ちゃんじゃなくて

蛍太くんだった。
びっくりして足を止めたあたしに気付き、蛍太くんが振り返る。
「ミーナちゃん」
「蛍太くん……」
フローラちゃんの魔法にかかっていた蛍太くんの様子を思い出して、びくっとしてしまう。
蛍太くんはそんなあたしのそばへは近付かずに、その場に立ったまま、あたしに頭を下げた。
「さっきはごめん！　魔法にかかっていたとはいえ、ミーナちゃんを怖がらせちゃった」
「……」
蛍太くんのつむじを見つめながら、小さな声で「あれは蛍太くんのせいじゃないから……」と言うと、蛍太くんは頭を上げて、ほんの少しせつなそうに微笑んだ。
「でも、怖がらせたのは事実だから。ミーナちゃんからバレンタインのプレゼントをもらって浮かれちゃったんだ。だからきっと、簡単に魔法にかかってしまったんだと思う。俺がいろいろ言っていたことは、忘れてほしい」
そっか。あの時の衣川くんの言葉は、やっぱり本当の言葉じゃなかったんだ。
ちょっと目に涙がにじんじゃったけど、あたしはがんばって微笑んだ。

「フローラちゃんの魔法は強力だから、仕方ないよお」
「ほんと、まじで強力だね。もしかして、俺が霊媒体質だから、よけいにかかりやすいとか……？」
考えこんでいる蛍太くんを見て、あたしは「ふふっ」と笑った。
大丈夫。あたしは笑える。
蛍太くんにバレンタインのプレゼントが嬉しかったって言ってもらえただけで幸せ。
人にちゃんと謝れる蛍太くんのことを、すごいと思う。
だって、あたしを馬鹿にしたクラスメイトたちは、誰一人、謝ってくれなかったもん。
「これからは、簡単に魔法にかかったり、取り憑かれたりしないように、気をしっかり持つよ」
決心したように胸を叩いた蛍太くんは頼りになる人だ。
あたしは蛍太くんに聞こえないように、小さな声で呼びかけた。
「蛍太くんはそのままで、十分すてきだよ」

その日の夜、あたしの部屋の窓ガラスが、コツコツと鳴った。

立ち読みサンプル
はここまで

なんだろうと思って窓を開けてみると、そこにいたのはフローラちゃんだった。元気のない顔をしている。
『えっと、ミーナ、あのね……』
フローラちゃんがもじもじしながら口を開く。
昼間はフローラちゃんにすごく頭にきていたけど、蛍太くんが謝りにきてくれてちょっと冷静になっていたから、私は彼女に優しく声をかけた。
「お外は寒いから、中に入って」
フローラちゃんはパタパタと飛んで部屋に入ってくると、飾ってあったウサギのぬいぐるみの頭にちょこんと腰かけた。
出窓の扉を閉めて、あたしはフローラちゃんを振り向くと、できるだけ落ち着いた声でたずねた。
「どうしたの？」
フローラちゃんは私を見て、胸がいっぱいになったように顔をくしゃりとゆがめた。そして、勢いよく頭を下げた。